

方々歩いて旅すれば  
いろいろな出合いと  
発見がある。  
見て聞いて歩いた  
まちの旅日記。

まちを歩く

Vol.2

# 牛窓の旧造船町 船大工棟梁に出会う

岡山県邑久郡牛窓町

写真・文 岡部知子



▲牛窓位置図

暑い夏……を予感させる6月の下旬、瀬戸内海国立公園に位置する牛窓町を訪れました。その理由は、2002年、「全国町並みゼミ」が行われた広島県の鞆の浦でのことです。日本は「海道」による経済・文化に支えられていたということを知りましたが、私の本業は木材屋ですから、興味の概ねは町家・商家。見事に修復された「伝統家屋」の姿と、そこに住む人々が自然な調和を見せる「町並み」には大満足！ でした。その夜、仲間との酒宴は絶好調。

岸壁に見慣れない「船」が保留されているのです。一目で「木造船」と判るそれに、何とも言いようのない郷愁めいた気持ち、湧き上がってきたのです。ほろ酔い、町並み……。最高のシチュエーションに「木造船」はピッタリの役者だったのです。翌日、関係者に聞くとそれが「うたせ船」と呼ばれる漁船であること、今回のイベントのために特別参加しているのだということを知りました。「町並み」に流れる人々の賑わいに比べ、旧港に浮かぶ「うたせ船」は、往年の輝きを失った老人のように映り、静かに揺れているだけでした。私に「船」の知識はありません。しかし、その素材が「木」であり、造った人が「大工」だということ。世の流れ……だけでは済まずことのできない、何かを感じてしまったのです。同時に私は「船大工」というものに言い知れない興味を覚え、知人・友人をフル動員した結果、神戸商船大

学の教授をされていた、松本 哲先生に貴重な資料とアドバイスを頂き、牛窓に住む草井格さん(80)を紹介していただいたのです。

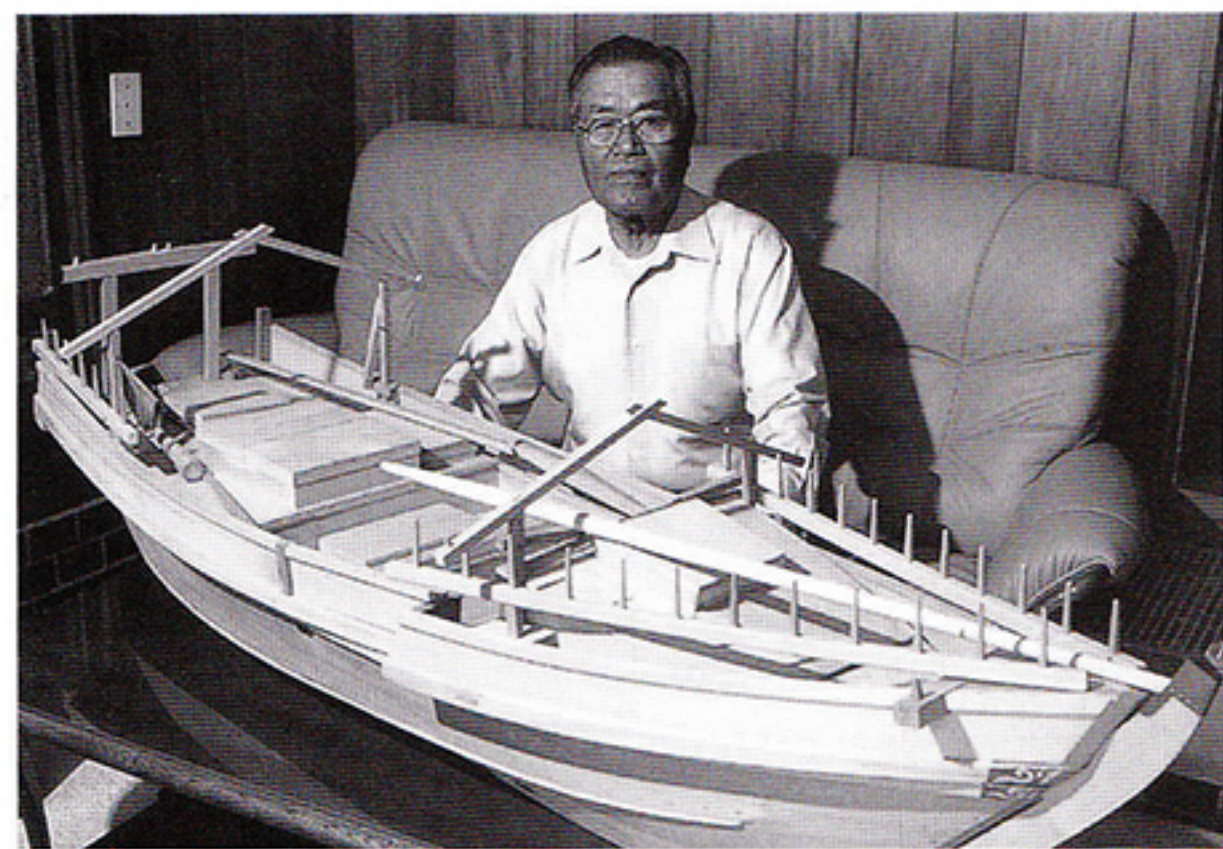
JR赤穂線邑久駅からタクシーで30分、降りた「牛窓」は想像していた景観とは違い、港にはブレジヤールボートが保留・上架され、地中海風のリゾートホテルが建ち、遠くの岸壁には、ヨットの



▲牛窓にある吉井格さんの作業場



▲和船造り独特の鉄釘



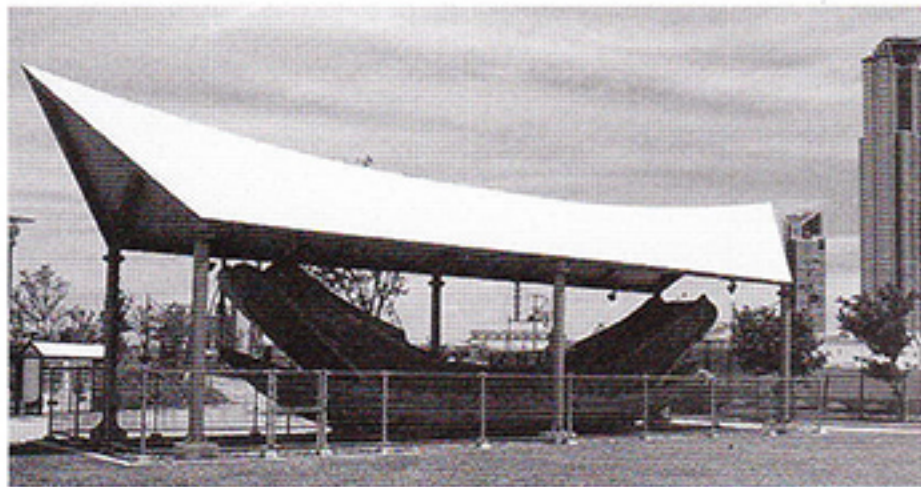
▲船大工の棟梁・吉井格さんと北前船の模型

マストが林のように見える……。イメージは大きく違ったけれど、「塩っぽい」雰囲気、一応の期待感は保たれました。地図をたよりに、草井家をめざす……が、よく見ると、全部「牛窓町牛窓」なのです。地図に細かな地番が書いてあるはずもなく、こんな時は地元の人に聞く！ できたら酒屋か米屋。交番で聞く方法も考えましたが、何故かお世話になったことはないのです。草井さんを具体的に知る人はいませんでしたが、職業を言うと「じゃあ東ですなあ。そこには、昔から造船所がたくさんありますから……」。その推測は正解でした。南東に突き出た半島の反対側に旧造船町はあり、途中、「本蓮寺」、「天神社」、「妙福寺」を過ぎ、急な下り坂を降り、途中から見下ろす景観は素人の私にも分かる造船所の集落でした。降りてすぐの造船所で「草井さんのお宅に行きたいのですが……」と尋ねると、「あ、あそこ！」と指を指す。その指先は3〜400メートル先の集落を指しているのです。「どこ？」もっと詳しく聞きたかったのですが、作業場から生まれるさまざまな音や、真剣そのもので働く人の雰囲気、それ以上の愚問は失せてしまいました。

草井家はすぐに見つけることが出来ました。しかし、草井さんは船釣りに出かけお留守でした。しばらく応接で待っていると玄関の戸が開き、草井さんが顔を出しました。80才とは思えない若さに驚きました(写真を見ていただければお分かりいただけるはず……)。「いやあくすみませんなあ。松本先生に連絡は頂いていたんですが、釣り始めるとねえ……いやあ、すんませんなあ！」と笑顔で入ってきました。

草井格さんは11代目の棟梁。木造船業界にかけりが見え始めたのは、昭和30年くらい。そして、それがハッキリと見えたのは同40年後半、某大手





▲時空間（大阪市・南港）に展示されている「なみはや」

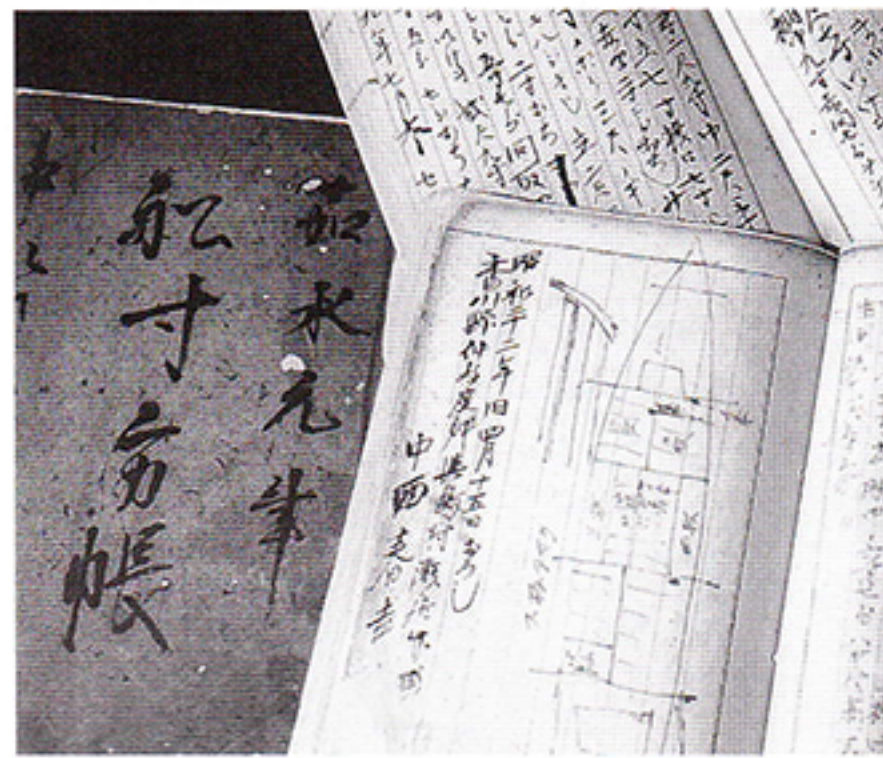


▲天神社から見た瀬戸内海を望む牛窓の風景



▲850年生の米松の原木から生み出した「なみはや」。6ヶ月を要して建造された

エンジンメーカーが漁船を造るようになってからだったと回顧する。当時の業界は、「木」から「鉄」。「木」から「ファイバーグラス（FRP）」に変貌したのです。前者は比較的大型の船、後者は近海を操業する小型の漁船で、草井さんは主に小型の造船に対応して今日に至っています。要は、FRPの船体の内装材に「木」が使用され、異物質（FRP）との調和で最新の「船」が出来たのです。当時のFRP船にはかなりの木材が使用されていきました。そこに、「船大工」としての経験・知識が役立つ場があったのですが、昨今にいたっては、ほぼ100%がFRP素材で造船されるのが現状。「寂しい限りです……」とポツリ、



▲船の設計図と見え書き

本音を聞きました。しかし、その顔が暗いわけではありません。「船大工」60年の充実感に満ちた「いい顔」でした。

そして、草井さんは奥の納戸から数冊のアルバムを出してくれました。「これ見てください……」少年のように目が輝いていました。それは、大阪100周年記念事業の一環で実現した古代船「なみはや」の建造記録写真でした。6ヶ月を要して建造された一部始終は草井さんの宝物。直径2m、長さ12mの米松。樹齢650年は米国オレゴン州から航送されました。そのほか、船大工としての話が淡々と語られていきます。

建築材としての「木」は、目のつんだものが喜ばれる傾向にあるが、曲線の多い「造船」においてはその逆、目粗な方が喜ばれたそうです。その点、宮崎の材は、温暖多雨の環境が、木を年に1cmもスクスク育ててしまうのです。70〜80年生の飯杉を使用すれば、継ぎ目の少ない船体に出れるのです。それに、「建築」と異なり「造船」では板に焼きを入れて木表を船内に向ける。すなわち「木」が水を吸って反りが出る性質を利用し、浸水を防いだ。それが木裏を船体の外に向けて使用した理由なのです。そして、「ろ」は樫の木（九州 いちぎ樫）、「船首（名首）」は大ケヤキ、「船梁」は、備州産（勝山・新見）ヒノキが良いとされたのだそうです。このたび、草井さんにはもっと多くのお話を伺ったはずですが、その何分の一ほども表現できませんでした。ただ、「船大工」としての人生を語っていただき、「人の寿命」の短さと「伝統」、時代という怪物の変化に空しさを感じたと同時に、世代を超えて成長し、人の寿命が霞んでしまうほどの「木」の寿命と生活文化の重要さを、今更のごとく再認識してしまったのです。

おかべ・ともこ